

●東京研修

私たちは東京に着いてすぐ、ディレクトフォースが行われる笹川平和財団 11 階の国際会議場へ向かいました。今回のテーマは「世界を視野に、自らを生かす。」です。基調講演をいただき、世界的な企業や国際機関などで活躍されている方々とグループディスカッションができるという願ってもない体験の場です。その中で印象に残ったことを書こうと思います。

1 ラウンド 20 分、初めに私たちのテーブルにいらっしゃった方は、三井物産役員で米・英・ブラジル駐在合計 11 年の遠藤さんです。最初ということもありグループ全員が緊張していました。質問が途切れて静まり返ることが重なってしまい、遠藤さんから「何でもいいから口に出すこと」と指摘されてしまいました。外国では黙っていても誰も察してはくれない。日本人のように” 空気を読む” こともない。彼ら外国人と対等に渡り合うためには、相手の顔色なんてうかがっていないで自分の意見を言い、自ら前へ前へと頭を使って進んでいかなければならない。遠藤さんは「怒っているんじゃないよ。」と言われましたが、強い口調で言ってくださったのは、私たちのために思っていたことでした。今、この場から世界に出る準備は始まっているんだと気づいてほしかったのだと思います。日本人の置かれている現状と世界へ羽ばたくことの意義、そしてその為の能力を身につけることがいかに必要であるかを、必死に伝えようとしてくださっているのがよくわかりました。誰かが言ってくれるんじゃないかとか、同じ意見だから言わなくてもいいだろうとかいうのは、日本ではよくても世界では通用しないのです。まず、自分の意見をしっかりと持ち、何事においても積極的な姿勢が最も大切なのだとわかりました。その後が続いた 3 人の方々とディスカッションでは、実際に体験された面白いエピソードをお聞きしたり、たくさん質問したりして、有意義な時間を過ごすことができました。私は遠藤さんから言われたことがずっと頭にあったので、ディレクトフォースの後の企業大学訪問や、翌日の東大オープンキャンパスで、今までにないくらい積極的に質問をし、たくさん意見を言い、会話を通して多くの方々とコミュニケーションをとることができました。そしてそれは自分の気持ちが高揚する、白熱した二日間でした。

私たち二高生は、いずれ社会へ出ていくことでしょう。そのころは今よりももっと世界が身近になっているはずです。世界で通用するコミュニケーション能力を養うために、日頃から周りの人との会話を大事にして、どんなことにも興味を持ち、自ら楽しもうと心の底から思いました。

●企業大学訪問「東京大学 分子細胞生物学研究所」

我々第 3 班は企業大学訪問として、東京大学分子細胞生物学研究所（分生研）のゲノム再生研究分野に在籍されている小林武彦教授の研究室を訪れました。東大分生研では、生命現象の秘密を分子レベルで解き明かすことを目的とし、得られた知見をもとにして、がん感染症、心疾患などの治療のための創薬研究や再生医療の基礎研究などが行われています。そして、小林教授がいらっしゃるエピゲノム疾患研究センターの中のゲノム再生研究分野では、生物のデザインを決めるゲノム（遺伝情報）の再生メカニズムと、その破綻が引き起こす細胞老化、がん化の機構などの最先端の研究が行われています。

この研究室訪問のアポイントをとったとき、小林教授から、研究室を訪れる前にその日行われる東大オープンキャンパスの小林教授の講義を全員で聴講するように指示を受けました。この講

義は事前ウェブ申込制・限定 50 名の大変人気の講義だそうです。そのウェブ申込開始時間が午後 2 時からで授業中であつたということもあり、実際に申し込めたのは自分だけでした。私は、講義を聴く権利を得られたことは大変嬉しかったのですが、「班全員で」というのが条件であつた為、どうなるのか不安でしたがキャンセルはせずにいました。学校での東京行きのガイダンスも終わりに近づく頃、班全員が東大の敷地内にいれば単独行動もやむを得ないということで、特別に私だけ講義を聴くことを許可してもらいました。班のメンバーにはわがままを言ってしまう、とても申し訳ないと思いました。そして、せっかくこのチャンスをいただいたのだから、とことん準備して行こうと思い、研究室のホームページを調べたり、教授の論文などをプリントアウトして資料を作りました。その中で、小林教授が本を書かれていらつしやることを知り、すぐにその本も入手しました。それは、岩波ジュニア新書から出版された「寿命はなぜ決まっているのかー長生き遺伝子のヒミツー」です。タイトルからしてとても面白そうです。私は通学時の電車の中などで少しずつ読み進めました。本の内容は「なぜ生き物には寿命があり、生き物の種類によって寿命が違うのか？実はその謎を解くカギは遺伝子にある」という、遺伝のしくみや寿命を決める遺伝子の働きについて解説されているもので、中学生から大人まで誰が読んでもわかりやすく楽しめる本になっています。私はもともと理科に関する本を読むことが趣味ですが、遺伝子について詳しく書かれた本を読むのは初めてだったので大変興味深く面白かつたし、とても勉強になりました。

さて、ここでその日の行程を確認したいと思います。午前 of ディレクトフォースを終えて、笹川平和財団を後にしたのが午後 0 時半でした。申し込んである東大の講義は午後 1 時開始です。この講義は 2 部に分かれていて、小林教授の講義は後半です。虎ノ門から東大まで、どんなにスムーズに行けたとしても 30 分以上かかります。初めての街並で戸惑つたことと乗り換えなどに時間を取られて、南北線の東大前駅に着いたのは 1 時 20 分を過ぎていたと思います。駅を出て「先に行つていいよ。」という班のみんなの言葉に甘えて、そこからダッシュで向かいました。講義が行われる生命科学総合研究棟 B は、農正門から入ってまっすぐ進んだ奥の方にあります。地図では近いと感じましたが実際に行ってみると東大の敷地はものすごく広く、なかなかたどり着けません。猛暑の中を汗まみれになりながら走り、やつとの思いで到着し会議室に入ったときは、小林教授の講義はまだ始まっておらず、泊教授のセントラルドグマについての講義の終わりの方でした。ぎりぎり間に合つたのです。しかしその部屋には次に講義をされる小林教授もいらつしやいました。一人、大遅刻してとても気まずかつたのと、着席したとたん止めでなく汗が噴き出してきて落ち着くまで本当に大変でしたが、こんなに苦労して来たのだから講義はしっかり受けようと思い、集中して聴くよう努めました。小林教授の講義は「寿命はなんで決まっているの？」という、教授が書かれた本の内容も含めてわかりやすく解説した、大変面白いものでした。私は、東大の講義なのだからものすごく難解なんだろうなと思っていましたが、教授は冗談を交えながらとても和やかな雰囲気の中、わかりやすく説明してくださいました。楽しい講義はあっという間に終了してしまいました。私は小林教授のもとに行き、遅刻して申し訳なかつたことと、このあと研究室におじゃまする仙台二高の〇〇です、と挨拶をさせていただきました。すると教授は「え？この講義聴いちゃつたんだ！このあとみんなに同じ講義するけど、君、質問しても知らないフリしてね。」とおつしやいました。とてもフレンドリーな対応に思わず笑つてしまい、なんて親しみやすい方なのだろうと思い、このあとの訪問がより楽しみになりました。

小林教授は私たち班の為に、特別に講義をしてくださいました。その中でたくさんの質問に答えていただいて、事前に本を読んでいって生まれた疑問の数々はすべて解消できました。その後、

小林教授とともに研究をされている4名の助教授の方々に研究室を案内していただきました。研究室はとても広く、いくつもの部屋に分かれています。そこでは、ゲノム解析用の最先端の機械やDNAを使った実験器具、現在注目されているES細胞、過去にその扱い方で問題になったヒーラ細胞などの貴重なものを自分の目で見ることができました。特にヒーラ細胞については以前テレビで見たことがあり、がん患者から採取されたがん細胞が本人の承諾を得ずに培養され、世界中の研究所に提供されたことを後に遺族が知り、倫理的な問題になったというものです。しかし、がんの研究に多大な貢献をしていることも事実です。このような細胞の実物を目の当たりにしたことで、自分の中での理解と興味がさらに深まり、同時に生命の尊さについても深く考えさせられました。助教授の方々は小林教授のように優しく接していただき、その都度疑問に思ったことすべてに答えてくださいました。

予定していた時間は大幅に過ぎ、あっという間に3時間がたってしまいました。このあと品川プリンスホテルへ向かうこと知った教授は、最寄りの駅まで私たちを送ってくださいました。みなさんはお忙しいにもかかわらず、私たちの為に快く接していただき、本当に感謝の気持ちでいっぱいになりました。

お話の中で小林教授は、「忙しくても暇そうにするのが得意」とおっしゃっていました。おらかな人柄のあらわれだと思います。小林教授のお言葉に次のようなものがあります。「研究者は知の探求者である。未開のジャングルをワクワクドキドキしながら探求し、お宝である”知”を探し出すエキサイティングな職業です。隊員には水と食料と簡単な地図は用意しますが、あくまでも自分の足で探ってください。」私は、研究者は成果が得られるまで地道な努力と忍耐力が必要な、どちらかという地味な職業だと思い、すぐに結果を求めようとする自分には向いていないのではないかと思っていました。でもこの言葉を知って、研究者のイメージがガラッと変わりました。自分もお宝を探り当てたい。”知”を手にしたい。研究者という職業にとっても魅力を感じました。今日という日は、私が16年生きてきた中でも最高に充実した日となりました。こんなに素晴らしい機会を与えてくださった小林教授と研究室の皆様、学校や先生方、班のメンバーや親、すべての人に心から感謝します！そして将来の自分を想像しながら、できる限りの努力をしようと心に誓いました。

左より、飯田助教授、林先生、千葉、磯辺、小林教授、虻川、佐々木助教授、高橋

